

高等教育の質とその評価——日本と世界

## はじめに

山田礼子（同志社大学）

本書は、平成22年～25年の科学研究費基盤研究（A）「大規模継続データの構築を通じた大学生の認知的・情緒的成長過程の国際比較研究」の研究成果が基盤となっている。一連の研究を通じて、学士課程教育がいかに関学生の成長や学習成果につながるかというカレッジ・インパクトを実証的に検討することに主眼を置きながら、そのための方法として学生調査を開発し、国内での継続的な実施とともに国際比較を行うことも視野に入れながら、研究を推進してきた。国際比較という側面では、日本版大学生調査の翻訳による韓国版大学生調査を24年と25年に韓国の共同研究者を中心に実施し、日韓のデータを結合させて分析することができた。これにより、韓国では学生の自主的な学内外での活動が学習成果に結びつき、日本では教員の学生への関わりが学習成果に影響を与えているというカレッジ・インパクトの差異が知見として得られた。25年にはUCLAからデータの供与を受け、日米韓のデータを結合させる3地点での国際比較分析が可能となった。国内面では、10年間継続して科学研究として実施してきた日本版学生調査（参加機関は866校、参加人数は約13.8万人）は、25年で開発を終了し、各大学の教育改善に資する「全国大学共通型」学生調査プロジェクト（JSAAP = Joint Student Achievement Assessing Project）として事業化（26年から）している。

一方で、日本および国際版学生調査の開発を通じて学習成果の間接評価の有効性は、カレッジ・インパクトの知見からある程度検証することができたが、間接評価による限界も確認した。「大学教育の質と学習成果」との関係

の検証とその測定には、学生調査という間接評価だけでは限界があることは、近年米国の多くの研究者が指摘している。こうした指摘に対応して、現在米国では、大学教育の質と学習成果の測定には、学生調査と標準試験やルーブリック、ポートフォリオ等の直接評価の両方を多用している。私たちも、韓国との共同研究を通じて、グローバル化した21世紀の知識基盤社会で求められる学習成果には、国境を越えて共通性があるのではないかという課題を認識した。日本発の学生調査を海外で実施し、その中に直接評価を統合し、クロスナショナルに検証することが大学教育の質、より焦点を絞った場合の学習成果の評価研究の次の挑戦であると認識している。

さて、直接評価と間接評価が測定する「もの」の一致は確実ではないし、簡単ではない。そこには解釈の難しさと対象とするレベルの差異が存在する。そうした差異をどう乗り越えていくのか、あるいは評価手法をどう併用していくのが重要である。自分の授業の改善に使うのか、プログラムレベルで使うのかで求められる手法は異なるのが当然だろう。科目、プログラム、機関といった階層の違い、さらには組織文化の共通性や差異を視野に入れて評価研究を進めていかねばならないだろう。

実証研究だけでなく、本研究では国際的なネットワークの構築をめざして開催した4回の国際会議の知見も大きかった。テーマは、一貫して「グローバル化社会における高等教育の質」、「質の評価」、「教育を通じての学生の成長」に置き、学生の認知的・情緒的な成果の測定と大学教育の関係性、それらを通じて見えてくる高等教育の質とその評価について海外研究者とともに本質的な議論を行い、世界の動向や政策の共通性を確認することもできた。こうした議論を通じて、高等教育の質の評価には、「外部質保証」と「内部質保証」の仕組みが有機的に連携しなければならないことを実感した。「外部質保証」あるいは「内部質保証」のいずれかだけが進捗したとしても心もとないのではないか。外部質保証の進展だけでは、高等教育機関の自立性もしくは自律性が担保できない。一方、内部質保証のみに頼るとすれば、しばしば自己満足という陥穽に陥る危険性もある。いかに両者をバランスよく進展させることが大事であるかも、海外研究者との議論を通じて把握できたこ

とであった。

高等教育を巡る環境の変化は著しく早い。本研究に着手した当初においては、標準的な学生調査を開発することに重点を置いていたが、現在では学生調査のみならず、ベンチマークができるような直接評価モデルの開発が求められるようになってきている。同時に、ICTを利用してのベンチマーキングシステムの開発の深化も期待されるようになってきた。しかし、未だにベンチマーキングは平坦なレベルを超えるには至っておらず、とりわけ、国際的なベンチマーキングは大学ランキングを含めても改善すべき点は大きいにあると考えている。学習成果の国際的なベンチマーキングの開発に至っては、横断的な研究の蓄積が不足していることもあり、今後も重点的に注力していく必要があると思われる。そのためにも、国際的なネットワークの構築と充実は必至であると認識しており、継続的な努力を積み重ねていきたい。

本研究を推進してきた研究グループの皆さんおよび国内外の研究協力者の皆さんに御礼を申し上げたい。標準的な学生調査の開発やその実施、国境を越えて調査を実施し、国際会議を開催するという大変な作業には、それぞれの担当者や協力者の強い意志と協力がなければ実現することは不可能であったと思う。また、東信堂の下田勝司社長には、著書の構成、方向性についても的確なアドバイスをいただいた。心からの感謝の意を示したい。

最後に、本書が高等教育の質と大学教育の成果の評価の研究に少しでも役立てればと願っている。

2016年7月

編者



目次／高等教育の質とその評価——日本と世界

はじめに…………… i

序章 間接評価の開発とその効果の検証……………山田礼子…3

はじめに——本研究がめざしてきたもの 3

- 1 本研究の到達点 7
- 2 本研究が乗り越えるべき課題 10
- 3 本書の構成 12

## 第Ⅰ部 質保証 高等教育の質 国際比較……17

第1章 高等教育における質のアセスメント…………… 舘 昭 …19

——動向と課題

はじめに——質のアセスメントの動向と本章の課題 19

- 1 評判によるランキング 20
- 2 容易に収集可能なデータによるランキング 21
- 3 恣意的な重みづけ 25

おわりに——より根本的な問題とアセスメントの課題 27

第2章 高等教育と質の問題……………J. N. ホーキンス（森 利枝訳）…31

——内部質保証と外部質保証の視点

- 1 世界的競争力の追求と評価文化 31
- 2 アク্রেディテーションと学習成果——背景にあるもの 32
- 3 学習成果とアク্রেディテーション 36
- 4 内部からの質保証と学習の改善 46

おわりに 52

第3章 オーストラリア高等教育における基準の明示化への  
挑戦……………S. アルコウディス（沖 清豪訳）…55

はじめに 55

- 1 高等教育における質保証 55
- 2 オーストラリア高等教育基準枠組み 58
- 3 現在の開発状況 59
- 4 オーストラリアにおいて教授学習基準を開発するための課題 61
- おわりに 66

#### 第4章 大学の質保証と大学ランキング …………… 小林雅之…69

- 1 本章の課題 69
- 2 大学の質保証と大学評価 70
- 3 市場型と制度型大学評価 72
- 4 市場型大学評価と大学ランキング 77
- 5 制度型と市場型大学ランキングの比較 79
- 6 世界大学ランキングと大学ランキングへの向き合い方 85

#### 第5章 東ヨーロッパの高等教育における

国際競争 …………… V. D. ラスト (中世古貴彦訳) …89

- はじめに 89
- 1 旧ソビエト時代における東ヨーロッパの高等教育 90
  - 2 国際的な大学ランキング 91
  - 3 ワールドクラスになるという圧力 93
  - 4 質の保証 98
  - 5 国際化と学生の流動性 101
- おわりに 103

#### 第6章 大学・政府・社会 …………… 山本眞一…105

——日本における近年の大学改革の背景

- はじめに 105
- 1 高等教育改革の理由と動機 106
  - 2 規制緩和と説明責任 110
  - 3 政府全体の行政改革の一環としての高等教育改革 112
  - 国立大学の法人化

4 大学と政府との新たな関係 114

第7章 質保証のための学生参画 …………… 田中正弘…117  
— イギリスの事例から

はじめに 117

1 戦略 2011-14 117

2 学生参画の在り方 119

3 NUS との協同プロジェクト 122

4 学生参画の現状 126

まとめ 129

**第2部 学習成果、学習成果の測定方法……131**

第8章 JJCSS に続く新たな短期大学生調査  
の開発 ……………山崎慎一・堺 完…133  
— ヒアリング調査の考察を中心に

はじめに 133

1 研究対象と目的 136

2 これまでの JJCSS の利用状況と問題点 137

3 ヒアリング調査の実施 138

4 JJCSS を利用した学習成果の評価の可能性 140

5 おわりに 144

第9章 短期大学学生の進学動機と将来展望 ……森利枝・堺 完…147  
— JJCSS の結果から

はじめに 147

1 調査の概要 148

2 進路選択のモチベーション 150

3 将来への希望 154

おわりに 159

第 10 章	JCSS に見る大学教育におけるアクティブ・ ラーニングの状況	安野舞子	161
	はじめに		161
	1 分析の概要		163
	2 アクティブ・ラーニング型授業の専門分野別取組み状況		164
	3 アクティブ・ラーニング型授業と授業外学習時間		167
	4 アクティブ・ラーニング型授業と学習行動		169
	5 アクティブ・ラーニング型授業と学習成果		172
	おわりに		175
第 11 章	継続・複数学生調査の不変性と可変性に 関する探索的研究	杉谷祐美子	177
	はじめに		177
	1 データの概要と分析方法		178
	2 不変性のある項目と可変性のある項目の特徴		180
	3 不変性の高い項目例に見る回答の分布状況		186
	4 可変性の高い項目例に見る回答の分布状況		190
	おわりに		194
第 12 章	項目反応理論を用いた大学満足度項目の等化	木村拓也	199
	はじめに——大学満足度の問題構図		199
	1 先行研究の整理と本研究の課題		200
	2 データ概要		203
	3 方法——項目反応理論を用いた大学満足度項目の等化		204
	4 結果		207
	まとめ——大学満足度の経年変化の可視化		208
第 13 章	どのような学生が「主体性」を伴う学習行動を してきたか	西郡 大	213
	——日本人版新入生学生調査（JFS2013）を活用した要因分析		

はじめに	213
1 データ概要	215
2 分析の視点	216
3 結果	217
4 考察	226
第14章 学習成果志向の高等教育政策における日本人大学生の 学習成果の検証	山田礼子…229
はじめに	229
1 日本における最近10年間の高等教育政策動向	230
2 中央教育審議会2012年答申における新たな視点	233
3 先行研究の整理と問題の設定	234
4 分析に用いるデータと研究の枠組み	236
5 調査結果	238
考察とまとめ	243
終章 高等教育の質評価の将来	山田礼子…247
執筆者紹介	253
事項索引	257
人名索引	261



編者紹介

山田 礼子(やまだ れいこ)

同志社大学社会学部教授、高等教育・学生研究センター長、前学習支援・教育開発センター所長。前中央教育審議会大学分科会大学教育部会専門委員。国立大学法人評価臨時委員。日本高等教育学会事務局長、大学教育学会副会長、初年次教育学会前会長。1978年同志社大学文学部社会学科卒業。

1991年カリフォルニア大学ロサンゼルス校教育学大学院博士課程修了。

1993年同大学より Ph. D. 取得。プール学院大学助教授、同志社大学助教授を経て、現職。主要著作：『大学の IR：意思決定支援のための情報収集と分析』（編著）慶応義塾大学出版会 2016年 『*Measuring Quality of Undergraduate Education in Japan: Comparative Perspective in a Knowledge Based Society*』2014年 Springer（編著）『学士課程教育の質保証へむけて—学生調査と初年次教育からみえてきたもの』2013年（単著）東信堂。『学びの質保証戦略（高等教育シリーズ）』2012年（単著）玉川大学出版部。『大学教育を科学する—学生の教育評価の国際比較』2009年（編著）東信堂。その他日英論文多数。

---

## 高等教育の質とその評価—日本と世界

2016年9月10日 初版第1刷発行

[検印省略]

---

編者◎山田礼子／ 発行者 下田勝司 装丁：桂川潤

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

---

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL (03) 3818-5521 FAX (03) 3818-5514

発行所  
株式会社 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

E-mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

---

ISBN978-4-7989-1383-4 C3037 Copyright © Reiko YAMADA